

## 巻頭言

# 義談イモ争鳴百家

財団法人 いも類振興会

理事長 健 蔵 生天目

イモ類の中で、馬鈴薯は減反の傾向にはあるが、比較的安定した消費的地位を保っている。しかし、甘藷の方は浮き沈みが深い。殊に、戦中戦後の食糧難の時代に、救世主的な存在であったため、世の中が正常化するにしたがって、余計イモ離れが噴出している。

ところが、ここ数年来カライモ談義が復活してきて、全国的に百家争鳴の感を呈している。川越イモの友の会のようなシンプ的な応援団、鹿児島イモ同好会のような村おこしの起爆剤的な動き、年間の売上げ160億円の中から20億円を宣伝費に使って焼酎ブームを巻き起した薩摩酒造、多くの紙面をイモ振興に提供する南日本新聞と読売新聞、各地のイモフェスティバル、展示会、共進会等、百花繚乱の感もあれば、百家争鳴の姿でもあるといえることができる。

昔から「瓢箪から駒」という諺があることだから、これらの動きの中から、イモ振興につながる奇蹟が生れないとは限らないが、イモは山の自然薯を除いては、すべて農作物であり、農産物であるから、これらの運動が、イモの増産につながり、イモの消費につながらないと、一時的な線香花火に終る危険にさらされる。

これらの運動の動機には、古来名声の誇り高さを惜んで、保存運動的な意向で始まったものもあると思うが、世の中の諸事万端変

転して行く中で、旧の姿に戻すことは困難である。例えば、焼芋が全国的に繁盛した時代があったからとして、「夢よ、今一度」と念願しても、かなわぬ願望である。

焼酎ブームで、九州工場群は、一時工場の増設と増産に湧きたったが、これは酒税の偏差値がもたらした需要で、しかも、それは必ずしもイモ焼酎だけの独壇場でなく、雲海のソバ焼酎、三和や二階堂酒造のムギ焼酎等のサワヤカムードが招来したものだといえるから、イモ焼酎が今後も発展するという保証はない。しかし、イモの大量消化という面では、焼酎にいま一步研鑽を加えて、ウイスキーにかわる新しい洋酒に転化させて欲しい。

農水省の指宿試験場の梅村室長は、新しい用途に応じた、新しい品種の育成に全力を傾倒しており、「デザート・ポテト」なる新名称を与えて宣伝されておられる。一般の誰でもが、この態度を真似るわけには行かないが、イモの用途の近代化を図るためには、庶民の誰でもが実験することができる。

この原稿を書いているとき、鹿屋フェスティバルというレストランから、150万円をかけたという豪勢な「からいも料理とデザート群」と題した宣伝文書を頂戴した。別項(19頁)でも紹介したが、百家争鳴群も、県庁、試験場、研究所、大工場等とタイアップして、新しい用途の発見に尽力して欲しい。